

第1分科会

岐阜市立加納幼稚園



所在地 〒500-8483 岐阜市加納東丸町2-9-1
校長 藤村 美保子
児童数 98名(6学級)
連絡先 TEL 058-272-1077 FAX 058-272-1190
E-mail yo-kanou@city.gifu.gifu.jp
URL <http://www.city.gifu.gifu.jp/10075.htm>

【研究主題】

しなやかな心と体を育むための
教師の援助や環境の在り方

～友達と一緒に、主体的、活動的に遊び、
物事に柔軟な対応ができる心と体を目指して～



1 研究の概要

(1) 研究主題

本園の実態として今年度、3学年98名の園児が通っている。その中で核家族が全体の約9割弱、一人っ子又は2人兄弟が全体の約6割弱である。近所に同年代の遊ぶ友達がいる子が約4割で、少子化、核家族化と言える。また、体を動かして遊ぶことはほとんどの子が好きである。近所に公園など遊べる場がある家庭が約8割だったが、反面、家庭で戸外遊びより室内遊びをする子の割合が多いことに驚いた。例えば、1週間の内、室内遊びがほとんどという子が約6割、戸外遊びをよくしている子は約4割であった。体を動かして遊ぶことが大好きで、遊ぶ場あるにもかかわらず、家庭では意外と戸外遊びをする割合が少ないことが分かった。園では進んで戸外で遊ぶ子が多いが、中には、体の身のこなしがぎこちなかったり、「疲れた」と言ってやろうとしなかったり、自分の思うようにいかない遊びを止めてしまったりする姿も見られる。このようなことから、私たちは幼児の様々な動きを日々の遊びの中からとらえることに目を向け、これらの価値を見直す必要があるのではないかと考えた。そして、幼児期の運動の発達を理解して、一人一人の実情に応じた援助を行うことが大切であると考えた。

そこで、本園は研究主題を「しなやかな心と体を育むための教師の援助や環境の在り方」とした。しなやかな心と体というのは、次のように考えた。例えば、自分から十分に体を動かす心地よさを味わう姿、興味関心をもったことに主体的に取り組む姿、うまくいかなくてもまたやってみようと挑戦したりする姿、困っている友達に気持ちを寄せて声をかけたり手を差し伸べたりする姿である。自分の存在を教師や友達に肯定的に受け入れられていると感じたり、あたたかい雰囲気や触れ合いがあったりすることで、主体的に活動的に物事や環境に関わることができると考える。もっと遊びたい、これをやってみたいなど主体的に取り組むことで繰り返し遊び、工夫したり、試したり、自分の思ったことを表現したり、挑戦したりなど様々な遊びの面白さに触れることができると考える。

(2) 研究仮説

幼児の興味関心に沿った運動遊びの環境を整えることにより、幼児は多様な動きを経験し、体を十分に動かす心地よさを味わうことができると考える。季節や幼児の発達をとらえ、それに沿った運動遊びを誘発する遊具の数や設定場所を考えたり、継続的に取り組める場を確保したりなど、環境を整えることにより幼児が自ら試したり、工夫したりしながら環境に関わり多様な動きを経験することにつながると考えた。

また、3年間の生活を通して、遊びの中で自分の感情や思いを十分に表出できるように、教師が受け止めたり、幼児に返していったりことにより、さらに、意欲的に活動したり、友達との遊びの中で互いの思いを知ってどうするとよいかを考えようとしたりする心が育つと考えた。「できた!」「うれしい、もっと!」という思いは有能感につながり、できるようになりたいという願いは自己決定の姿につながると考える。このような思いがもてると幼児は何事にも前向きに取り組み、友達と一緒に遊びを楽しむために考えようとするコミュニケーション能力が育つと考える。

(3) 研究内容

① 運動の楽しさを味わわせる場の設定や教材の開発

ア 主体的に取り組める多彩な動きのある運動の工夫

イ 友達と一緒にイメージをもちながら、園内の環境を生かした遊びの工夫

② 運動の本質に基づく教材分析と系統性を重視した指導計画の作成

ア 指導計画（運動遊び編）の作成

③ 保護者、関係機関との連携による適切な評価

ア 生活習慣の改善

イ 体力測定の実施（岐阜大学の協力）



2 公開授業

（1）3歳児 体を使った遊び「砂場」「鬼ごっこ」

授業者：宮内 峰子 教諭 上田 育代 教諭

教師が事前に砂場に高い山を作っておくことで、興味をもって自分から遊び出す姿が増えてきた。登ったり、駆け降りたり、また、手押し車に砂を入れて押しながら登ったりする姿が見られた。足を踏ん張ったりバランスをとったりして動いていた。また、高い山を継続して作っておいたことで、今まであまり興味を示さなかった子が友達の姿を真似てやってみる姿が見られた。

わらべ歌遊びを始めると教師や友達と一緒に遊ぶことが楽しくなっている子供たちが集まってきた。言葉のかけ合いを楽しみながら、鬼役の言葉を聞いてから走る、捕まったら止まるなどの動きができるようになってきた。今日は教師を捕まえようと先回りして走ってくる姿も見られた。短い距離を教師や友達の姿を見ながら思い切り走ることを楽しめるようにした。

（2）4歳児 体を使った遊び「しっぽとり」「たんけんごっこ」

授業者：高橋 佐知子 教諭 小島 崇徳 教諭

子供たちが物語本「たんたのたんけん」からイメージした、探検ごっこが思い出の森を活用して遊べるようにした。トンネルやゴムくぐり、的当てなど様々な仕掛けを子供たちと準備し、思わずやってみたくなり体を動かして遊べる環境を整えていった。子供たちは「探検に行こう！」と張り切って思い出の森へ出掛け、的に向かってボールを投げたり、体を小さくかがませてトンネルをくぐったりなど、いろいろな体の動かし方を楽しみながら遊んでいた。



また、園庭では、しっぽに見立てたひもをズボンに挟んで、「しっぽとり」も楽しんだ。より運動遊びが楽しめるようにしっぽは何本付けてもよいこととし、しっぽを取られても、続けられたり、なくなったら自分で付けたりできるようにしたことにより、多くの子供たちが園庭を思いっきり走る姿が見られた。教師も思いっきり走って追いかけることで、子供たちも嬉しそうに走ったり身をかわしたりしている姿が見られた。



（3）5歳児 体を使った遊び「ドッジボール」鬼ごっこ「どろけい」「一輪車・縄跳び」

授業者：丸目 尚子 教諭 磯村 満 教諭

春から親しんできたドッジボールでは、自分たちで遊びを進めていく姿が見られ、思いっきりボールを投げたり、友達が投げたボールを捕ったり、ボールをよけたりという動きが活発に行われていた。困ったことが起きたときに、どうしたらよいかとみんなで話し合うこともでき

ていた。また、鬼ごっこ「どろけい」では、泥棒役も警察役もそれぞれに作戦を立て、どうやって捕まえるか・逃げるかを考えて相談し合う姿も見られ、教師はその様子を見守ったり話し合いに参加したりするなどした。



自分なりの目当てをもって遊んでいた一輪車や縄跳びでは、「〇〇までは進めるようになりたい」「〇回は跳べるようになりたい」という願いに向かって、それぞれが取り組んでいた。友達と縄を連結させて、友達と一緒に遊びたいという思いをもって工夫する様子も見られた。一生懸命取り組む姿を認めたり、縄跳びでは各々の頑張りを共に喜び合ったりするようにした。

(4) 3歳児 仲間とともに楽しむ遊び「帰りの会」

授業者：宮内 峰子 教諭 上田 育代 教諭

前半の公開保育①で体を使った遊びを十分に楽しんだことから、子供の1日の生活を考え、後半の公開保育②の時間では遊びの余韻に浸りながら心も体も休め、クラスでゆったりと過ごすようにした。制服を着用し始めて3週間目になるので、一人一人に着方を知らせながら自分で着用できたことを一緒に喜び、自分なりにやってみようとする姿を認めた。ピアノに合わせて秋の歌を歌ったり、手遊びをしていくなかで隣の子と顔を見合わせて笑ったり、楽しそうに歌う表情が見られ、ゆったりと絵本を聞いた。

(5) 4歳児 仲間とともに楽しむ遊び「帰りの会」

授業者：高橋 佐知子 教諭 小島 崇徳 教諭

たんぼぼ組は、わらべうた『なべなべそこぬけ』で友達と、ふれあい遊びをした。遊び仲間が2人、4人と増えていく中で、入り口を話し合い、自分の気持ちを伝えることができるよう、教師が声を掛けていくと、思いを伝え合っていた。全員で一つの輪になることができたときには一緒に喜び合うことができ、一体感を味わうことができた。

れんげ組ではリズム遊び『ロンドン橋落ちた』の曲に合わせて元気に歩いたり歌ったりして楽しむ姿が見られた。教師も子供たちと同じように歌ったりリズムに乗って歩いたりして、一緒に楽しむことでより楽しい雰囲気が高まっていた。曲の最後に橋が落ちる時には、捕まっても逃げてもお互いに笑い合い、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わうことができた。

(6) 5歳児 仲間とともに楽しむ遊び「鬼ごっこ」「玉入れ」

授業者：丸目 尚子 教諭 磯村 満 教諭

鬼ごっこは、教師も仲間になって一緒に遊んだ。鬼に捕まったら、ミニハードルを跳び越えるという“修業”を取り入れ、遊びが連続するようにしたことによりハードルを跳んでは戻るといった動きの確保につながっていた。



玉入れでは、クラスの一員であることを感じ、どの子もが『投げる』経験ができるよう、クラス対抗による学年の遊びを行った。男女ごとにゲームを行うことにより、投げる力量の差をカバーしたり子供同士の混雑さが緩和されたりしていた。待つ子や教師の声援を受けて、あきらめずに走ったり、勢いよく投げようとしたりする姿がよく見られた。

3 研究協議

- (1) 提案 司会者 : 高橋 佐知子 教諭
発表者 : 宮内 峰子 教諭 磯村 満 教諭

- ① 本園の研究テーマの受け止めと仮説
② 運動の楽しさを味わわせる場の設定や教材の開発の実践
3歳児 主体的に取り組む, 多様な動きのある遊びの実践
4歳児 イメージをもちながら, 主体的に遊びに取り組む実践
5歳児 友達と主体的に遊びに取り組む実践
③ 運動の本質に基づく教材分析と系統性を重視した指導計画の作成について
④ 保護者, 関係機関との連携による適切な評価について



(2) 協議内容 (□…質問・意見・感想)

※ 回答は, 発表者(宮内教諭, 磯村教諭)

- 玉投げのとき, ステップをして投げるなど運動量が多かった。今までどのような取り組みをしてきたのか。

A 新聞ボールを投げる遊びも含めて投げる遊びは継続して楽しんでいる。教師が投げ方を教えるのではなく, 遠くまで投げられる子の話を聞いて, 子供たちに広めた。また, 最初は短い距離を投げて取りに行っていたが, 玉までの距離を長くすることで作戦を立てるようになった。意欲も体力も付いてきた。

- 室内での体を動かす遊びを教えてください。

A 3歳児は室内に小さめの滑り台を用意したり, 新聞紙破りをしたり, 粘土をこねる, 足で踏むなど感触遊びをしたりしながら体を大きく動かして遊べるようにしている。4歳児は遊戯室でわらべうた遊びや, 巧技台や肋木などを組んだサーキット遊びの環境を整えることにより, 体を動かして遊んだりしている。5歳児は巧技台, 肋木, 平均台などを子供たちと相談してサーキットのコースを考えて遊んでいる。また, 紙飛行機を作って飛ばす遊びでは基本的な作り方からオリジナルの折り方を考え, 距離を競い合って飛ばしている。



- 異年齢の遊びはどのようにしているか。

A 日常の遊びの中で, 自分で興味をもった遊びを見つけて遊んでいるので, 学年やクラスにとらわれずに遊んでいる。例えば3歳児は, 4・5歳児が行うリレーやしっぽりの遊びに入っていく子がいる。大きい子たちと一緒に遊べる満足感や憧れの気持ちをもって遊んでいる。4・5歳児は3歳児に合わせてリレーの伴走をしたり遊び方を教えたりする関わりがみられている。

- 家に帰ってから戸外遊びについて変化があったか。

A 現在は調査してはいないが, 子供たちの話の中では戸外遊びが増えているように思う。

- 保育園や小学校との連携はどうか。

A 保育園との交流は今のところない。小学校とは, 5歳児と2年生が



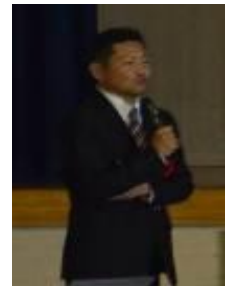
年間を通して連携を行っている。近くにある公園で手つなぎ鬼やだるまさんがころんだをしたり、さつまいもの収穫を一緒に行ったり、体育館で氷鬼などの体を動かして直接触れ合える遊びを意識した交流を行っている。

- 毎日、今日のような教師の動きか。今日のように展開していくためにしていることは。
- A 今日、公開保育②からは教育実習生もいたので、教師の数が多かった。毎週、「週案」という時間をとり、各クラスの子供の様子や来週の遊びについて交流しているので各担任は自分のクラス以外の子供のことや遊びについて把握している。また、毎朝、打ち合わせを行い、園内のどこかでどの先生がどんな遊びをするのか、どの子を配慮していくのかなどを具体的に伝えているので、各教師が、他のクラスの子も受け入れていける。

(3) 指導講評

指導助言： 岐阜大学教育学部准教授 春日 晃章 先生

目の前の子供のために、何が出来るか、体力面から考えてみたときに、青少年の平成10年から19年までの体力推移を見ても、走・跳・投（運動能力）は改善していない。特に、小学校低学年は、改善の兆候がない。そこで、幼児期の体力を向上していこうと考えたとき、継続して多くの友達と群れながら、運動遊びを向上させることが大切となってくる。運動遊びを継続していくことで、体が育ち、多くの友達と群れることで、心が育ち、それが社会性の育ちにつながってくる。文部科学省が出している“幼児期運動指針”にも「幼児期は様々な遊びを中心に、毎日合計60分以上、楽しく体を動かすことが大切」と書かれている。幼児が運動遊びをすると、遊びの中で社会性も身に付いてくると言われている。



今回の取り組みの特徴としては、“主体性”“良い動き&真の楽しさ”“工夫&活動量の保証”“実証”が挙げられる。

今後の課題としては、今回の取り組みを、スペシャルな取り組みで終わらせない（教師一人一人が運動遊びのよさに気付けるとよい）ことや、園全体で育む計画的チーム保育の確立をしていく（年中時に、経験値を取り入れていくことで、大きな伸びが見られる）こと、幼稚園教育要領を総合的に網羅するための運動遊びに取り組む（遊びの始まりから終わりまでが子供主体となるように。すべての領域に関わった運動遊びができるように）こと、保育者は20年後の子供の姿を気に掛けながら、保育・教育をしていくことが大切である。保育者の意識を高めるだけで、大きく改善する。運動・スポーツに興味が少ない保育者ほど、子供のために意識改革をしてほしい。

今日に加納幼稚園は、子供たちがとても遊び込んでいる姿があった。

※ 春日先生には、これまでも、研究会でご指導いただいたり、毎月の運動の会の際には、子供たちにボールを使った運動遊びや鬼ごっこで思いっきり走るだけでなく教師が子供たちにどのように指導していったらよいかについても教えていただいたりしてきた。

4 成果と課題

(1) 成果

- 教師が子供の運動発達の姿をとらえて、興味や関心に合わせた運動遊びの環境を構成することで、子供が戸外でいろいろな運動遊びに取り組むようになってきている。

- 運動遊びの指導計画を作成することで、年齢や発達に合わせた運動遊びを、計画的に取り入れることができた。その結果、例えば、ボールを投げる力が育つと、遠くまで投げようとする、的をねらって投げるなど、様々な投げ方をしようとする。出来ることが増えると、次の意欲が高まる姿も見られ、それが徐々にドッジボールなどの遊びにつながり、遊びながらさらに受ける、避けるなどの動きの幅が広がってきた。
- 2月、9月に行った体力測定の結果、4歳児では「25メートル走」5歳児では「ソフトボール投げ」に変化が見られた。4歳児は氷鬼や色鬼、高高鬼などいろいろな鬼ごっこを楽しむ中で、走ることが日常の遊びとなり、みんなが楽しんで参加していたことが、要因だと思われる。また、5歳児は、ドッジボールでよく遊んでいた。最初の頃は少人数だったが、ボールを投げる力強さ、ボールをかわす機敏さ、ボールを追い掛ける意欲、ボールを捕ろうと挑戦する気持ちなど、それぞれの楽しさを見出すと、多くの子供たちが参加するようになった。ルールも子供たちが話し合っ決めて決める場面もあり、ドッジボールがみんなの遊びとなったことが、数値の向上の要因だと思われる。好きな遊びを友達と一緒に存分に楽しむことが、体力向上につながったと考えられる
- 『いきいきチェック表』や体力測定などの評価により、子供の健康的な生活リズム、運動能力の実態を客観的にとらえることができた。それにより、望ましい生活の基盤づくりの大切さを保護者に啓発したり、家庭で体を動かして遊ぶことの提案をしたりすることができた。また、幼稚園では体を動かして楽しく遊ぶことができる教材の工夫ができた。
- 『いきいきチェック表』の取組では、子供たちの意識が向くように養護教諭が帰りの会などで話をした。その結果、登園時間が早くなったり、登園時の子供の表情から園で早く遊びたいという意欲が伝わってきたりするようになった。
- 戸外で体を動かして遊ぶ姿が増え、身のこなしがよくなったり、転ぶときに手が付くことができたり、急に立ち止まられたりするなどの姿が見られ、けがをして保健室に行く子が減った。
- 学年に応じた発達の動きばかりに重きを置くのではなく、友達との関わり合いや、一人一人の意欲など心の面にも目を向けていくことの大切さを学んだ。ドッジボールや鬼ごっこなど友達と一緒に体を動かしての遊びが繰り返されると、ルールなどを話し合う場面がたくさんあった。自分の思いを相手に伝えたり、友達の思いを聞いたりする中で、相手の思いを知り自分の振る舞いを考えたり、友達のよさに気付いたりなど、子供たちの心の育ちを実感した。



(2) 課題

- 今後も、子供たちが様々な運動遊びに意欲的、継続的に取り組み、しなやかな心と体を身に付けていくことを願う。そのために、教師は、目に見えてとらえやすい「動き」や「運動遊び」の様子だけでなく、一人一人の心の発達についてもきめ細やかにとらえ、援助していく。
- 指導計画に基づいた実践を通して、子供が意欲的に体を十分に動かし、主体的に環境に働きかけられるような環境構成や教材の工夫、教師の援助等を見直し、加除修正する。
- 各評価と保護者への啓発や提案が、どのように受け止められ、実践されているか把握するとともに、心も体も健康で戸外で生き生きと体を動かし、さらに、しなやかな心と体を育むことができるよう、継続的に取り組む必要がある。